

メリケン

第二次世界大戦で日本は敗れた。敗戦後、救援物資が主にアメリカから支給された。メリケン粉に水を入れて練って延ばし、うどんにして食べた。石油の匂いはするもののおいしかった。そのほか粉ミルク、缶詰類、H B T（軍服のお下がり）等が支給された。物が極端にない時代だったので、何もかも有り難かった。きのうまで米英鬼畜と言っていたものが、いきなり救いの神に思えた。

「メリケン」は、「米利堅」の漢字を当て「アメリカの、アメリカ人」を意味する。メリケン粉は、アメリカ製の小麦粉という意味で言った。学校給食に、粉ミルクやパンが使われるようになり、戦後日本国中に急速に普及した。アメリカの余った農産物の消費拡大につながった。奄美群島では、復帰後昭和二十九年から脱脂粉乳が飲用された。さらに昭和三十八年には与論でも、小中学校の完全給食が実施された。

アメリカの占領政策

アメリカの占領政策として3 R、5 D、3 Sがある。

- 3 R は、一、Revenge 復讐（ふくしゅう）
 二、Reform 解体して再組織
 三、Revive ポツダム宣言による復活
- 5 D は、一、Disarmament 武装解除
 二、Demilitarization 軍国主義の排除
 三、Disindustrialization 工業生産力の破壊
 四、Decentralization 中心勢力の解体
 五、Democratization 民主化。天皇を元首。神道を国宗
 排除、国旗・教育勅語の廃止
- 3 S は、一、Sex セックス
 二、Screen スクリーン（映像）
 三、Sports スポーツ

アメリカのマッカーサー元帥は、3 R、5 D、3 S を骨組項目に掲げ、占領統治をすすめた。

今までの復讐だ。日本を土台（思想、信条、主義等）もろとも全部

解体して作り直し、ポツダム宣言によつて復活させる。

そのための方法として、武装解除させ、軍国主義を排除する。工業生産力を徹底的に破壊する。そのために中心勢力となる三井、三菱住友、鴻池をはじめとした財閥を解体する。大地主も解体されて小作人に土地が分譲された。民主主義教育を徹底する。天皇を元首とし、国旗、教育勅語を廃止する。

日本が負けることなんかないと信じていた国民は、完全に打ちのめされた。戦前は、軍部によつて洗脳され、戦後は一転してアメリカに洗脳された。軍部による洗脳ぶりは、グアム島の密林のなかで二十八年もの間潜み、救出された横井庄一さんの「恥ずかしながら生きながらえて」の一言が、如実にそれを物語っている。

アメリカによる洗脳ぶりは、国旗、国歌、教育勅語を口にする事すらタブーとされたことに表れている。

昭和二十五年六月二十五日に朝鮮戦争が勃発した。マッカーサー元帥は、その時も総指揮をした。朝鮮戦争を通して日露戦争の日本側の

正当性を、マツカーサー元帥はアメリカ議會で証言している。

東京裁判では、日清、日露戦争から南京虐殺事件まで、日本の軍部の非をあげつらっている。南京では三十万人を虐殺したとなっていて、今でも真偽のほどは分かっていないが、ドウダンミン男は明らかにでっち上げだと思つている。その理由は、三十万人を殺すには、三十万発以上の玉がいる。武器弾薬は惜しいのにそんな無駄遣いをするはずがない。当時現地にいたアメリカのジャーナリストも、そんなことはないと言証している。中国は、今でもあつたと言ひ張る。それに日本の文化人なるものが荷担する。ドウダンミン男には分らない。

平成十六年八月七日に、アジア杯サッカー大会の決勝戦（中国対日本）が中国で行われた。中国国民の日本に対する敵愾心（てきがいらん）は、目に余るものがあり腹が立った。日本が勝つてくれたからいいものの、あれだけのなじり、ブーイングの嵐の中で、負けでもしようものなら泣きっ面に蜂で、相手はそれこそ狂喜の乱舞をしたであらう。よくぞ勝つてくれた。大和魂の気概をみた。日本から応援に行つたサポーターたちは、試合終了後、二時間もスタジアム内に待機させ

られ、群衆が散り、騒ぎが収まってからやつと帰りのバスに乗り込んだ。

その中国に対し日本は今までに三兆円もの資金を援助している。中国は核兵器を保有し、強大な軍事力を持ち、日本を小馬鹿にしている。中国は儒教の国であるならば、礼を重んじ、恩を思うべきである。共産主義の独裁国とはいえ、人倫の道を思うべきである。ひるがえって、相手が相手なら、日本も堂々とものを言い対処すべきである。

戦後日本はかくも卑屈になったものか。敗戦直後は、明るいところからいきなり暗闇に入ったときのように、全く何も見えなかったが、だんだん慣れてきて見えるようになった。敗戦から六十年、還暦である。我が日本よ、堂々と「誠打ちじゃしより・・・」。

平成十六年九月記

修身齐家治国平天下

平成十六年の参議院議員選挙に、北海道で鈴木宗男が、大阪で辻元清美が立候補した。

鈴木宗男は、議事堂内でのヤジの大将で、北海道沖繩開発庁長官をし、外務省を支配していたと言われる辣腕政治家だった。それが収賄容疑で起訴され、衆議院議員を辞任した。そして係争中にもかかわらず立候補した。

辻元清美は、鈴木宗男が国会で喚問されたとき、鈴木に向かって「あなたは疑惑の総合デパートだ」と決めつけていた。その彼女が、自分の秘書の給与を国からだまし取っていたとして起訴され、ぼろぼろ泣きながら、辞任の会見をしていた。

鈴木は、四十八万五千三百八十二票で落選した。

辻元は、七十一万八千二百二十五票で次点落選だった。

おとがめを受け辞任した人が、その謝罪の舌の根も乾かないうちに、しかも係争中に立候補するとは、ドウダンミン男には分からない

い。さらに分らないのは、何十万という得票である。ドウダンミン男は、自分のドウダンミンぶりを嘆き、寂しくなる。

警察のトツプクラスが、公金をかすめ飲み食いをする。警察のトツプが悪いことをしたら誰が捕まえるのだろうか、とこの国を嘆く。「修身齐家治国平天下」 天下を平らげく安らげくするにはまず国を治める。国を治めるには、家をととのえる。家をととのえるためには、自分の身を修める。

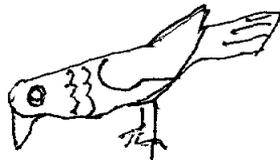
格物致知誠意正心

自らを律し修めようとする者は、それに先だつて自分の心を正しくする。自分の心を正しくしようとする者は、さらにその前に自分の意志を誠実にする。自分の意志を誠実にしようとする者は、さらに先立って自分の知識や知恵を明晰（めいせき）にする。知識や知恵を明晰にする方法は、物事を正しく受け止めることにある。

「格物・致知・誠意・正心」、「修身・齐家・治国・平天下」の八項目が、天下を平安にする徳だと、ものの本で勉強した。

出発点は個人。国民一人一人。まずは自分自身を修めること。
「こちらから」「自分から」・・・なーんちやって！！

平成十六年記



悪人正機

お母さんが下駄箱の上の花瓶を下ろし、ふき掃除をしていた。電話が鳴ったのでそのままにして電話の所へ行つて話をしていた。学校から子どもが帰ってきた。「ただいま」と玄関に入るなり「がちゃん」と音がした。お母さんが飛んできて、「ああ、お父さんが大事にしていた花瓶なのに」と言つた。子どもは、「こんな所に花瓶を置くなんて」と口をとがらせた。「どうしたのか？」とお父さんがきた。お父さんは「形あるものは壊れる」と言つて立ち去つた。どなられると思つていたお母さんは安堵し、ややあつて「ここに置いたままにしたお母さんがいけないかつたなあ！」と言つて片づけ始めた。子どもは「うかつだった」と欠けらを拾つた。

もし、お父さんがどなつていたら、お母さんは「私は悪くない」と言い、子どもは「ここに置くのが悪い。私は悪くない」と言い争いになつたであらう。二人とも善人である。しかし、お母さんも子どもも「私が悪い」と悪者になり、和やかになつた。

正義は人の数ほどある。

親鸞聖人は、「善人なおもって往生をとぐ、いわんや悪人をや」と説いた。「自分が悪い」と反省し、改心していこうという人間が、何で救われないことがあるのか、ということである。なるほど、なるほど、合点承知。

「自分は絶対に正しい」という善人の周りには、諍いが絶えない。交通事故を起こしたら、絶対に謝るな。自分は正しいと言い張れ、という入れ智慧のある世の中である。

弁護士様は偉いとおぼかり思っていた。しかし、殺人犯を弁護する弁護士もいる。悪い奴を悪くしないと云いくるめるのを思えば、悪玉である。しかもそれで報酬をもらう。

アメリカは、訴訟社会で弁護士が多いという。日本も悪人は減り、善人は増え、弁護士が繁盛する社会になりつつある。

増やしてもらいたい役人は、警察である。電話、インターネット、空中を飛び回っている情報を見回るお巡りさんがほしい。押し売り電話、脅迫電話、電話被害に戦々恐々させられる世の中になった。情報とは、「情けの報せ」となっているが、毒入りもある。

正義は国の数ほどある。

沖縄よりも大きい国後・択捉島・歯舞・色丹の四島、尖閣諸島、竹島など力づくで俺のものだという。「俺、俺、おれ、おれ」。

世界には悪い国などない。善い国、正義の国ばかりである。

ニヤ イチャシユンガ シユンガ！！

平成十七年三月十日

千手観音

四十数年前（昭和三十七年頃）、交通安全が茶飲み話に上がった。ある先輩教師が、「人差し指の先に目がついていたら、後ろも見えて激減するだろうがなあ！神様は、今日の交通戦争を予想できなかつたらしい」と言った。みんな笑うやら、感心するやら。

この奇抜なアイデア、千年も前に形にしたのが、千手（せんじゆ）観音像である。千の手は、人々の様々な願いの全てに応える慈悲の手で、その一つひとつに目が付けられている。千手という名は、数限りない人を救うという意味だそうである。京都の三十三間堂には千一体もの千手観音がまつられている。観音の「音」は人々の願いの声の音である。「観」は、これを親身になつて本質を見極めることを表している。見極めるために、わざわざ目を付け、同時に救いの手を出している。仏様も大変である。

虎やライオンの目は顔の前についている。牛や馬、山羊の目は横に

ついている。虎やライオンは強いから前だけ見ていなければならないが、食べられてしまう草食動物は、四方八方警戒しなければならないから、横についている。

魚、蛇、鳩、猿、人、みんな目は二つ。耳二つ、口一つ。みんな同じ。雌と雄だけこれも同じ。神様はみんな同じに作りたもうた。

お釈迦様は、人生は「苦」であると説いた。

苦に「生・老・病・死」の四苦があり、さらに「愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五陰縊盛苦」の四つを加えて、四苦八苦と称し、人生の難儀苦勞を総称させている。

四苦の「生・老・病・死」は魚も蛇も人もみな生き物共通、鳩や猿がそれを苦と思っているか疑問だが、それはさておき後の四つは、人間であるが故の苦である。

この苦から人々を救い出すための教えが佛教である。

お釈迦様は、その教えの基本に、「四諦八正道」をおいた。「諦」は

真理。四諦は「苦諦、集諦、滅諦、道諦」の四つである。

苦諦↓四苦をはじめとしてこの世は苦であるとすする真理。

集諦↓こうした苦しみが欲望にあるということ。

滅諦↓欲望を完全に絶滅した状態が、苦悩を克服した悟りの世界であるということ。

道諦↓克服する修行法のこと。

その修行法は、「八正道」と呼ばれ、次の八つの実践である。

正見↓正しく見ること。よこしまな、偏った見方をしないこと。

正思↓正しく考え、判断すること。

正語↓正しい言葉を語ること。人を傷つけず、嘘をつかないこと。

正業↓正しく行動すること。

正命↓正しく生活すること。

正精進↓正しく努力し続けること。

正念↓真理を把握し、正しい目的意識を持つこと。

正定↓瞑想によって、心が安らいでいること。

以上の八正道を行って苦を克服して理想の境地に達するわけだが、

この「正しい道」において、何が正しいのか、また問題である。

お釈迦様は、「苦樂中道」、すなわち苦行と快樂の極端に偏らず、しかも真理に合った道、目的になつた道と説いている。「中道」、なるほど。だが、その「中」がまたドウダンミン男には分らない。結局、藥局ドウダンミンするしかない。自分の中にある心の鏡に照らしてみるしかない。「自ら直くんば、われゆかん」。

お釈迦様の教えだけに、この「八正道」いちいちごもつともである。少しでも日々心がけて実行していききたいものである。仏様は、何千もの慈悲の手をさしのべて衆生を救おうとなされているが、救われるのはやはり実践者である。

救われる者は自らを救う者である。エッヘッヘー、分かつたかひや

平成十七年六月記

山川草木悉皆有仏

あなたの宗教は何ですか？ときかれたとき、「神道」と応えている。各地の神社で行われている格式を伴った「神道」ではない。自分の先祖を祭り、それを神様として拜んでいるだけである。だから「神道」というには戸惑いがあるが、説明するのが面どいから、そうしているだけのことである。祖先信仰教というのがあれば、まさにそれである。

佛教は、聖徳太子が積極的に布教した。徳川幕府は、寺を重んじ、「寺請制度」を作り、寺に現在の役所のような大きな権限を与えた。その反動として明治政府は、神道を重んじ、「廃仏毀釈」運動を強力にすすめた。沢山の寺が焼かれ、仏像が壊された。

与論中学校のプールのある所に、昔アガリーデラ（東寺）があつた。「鎌田常助氏の命による某氏二名が仏像を打折り、菅原池に投げ込んだ」と、与論町誌にある。その後某氏二人の身には芳しくないことが起こつたと噂された。菅原池で子どもが溺死したのは祟りだとも噂された。

プール建設のとき、「あそこにプールを造るとは何事か。子どもたちの身に事故が起こったらどうするのだ」と、脅かし半分のことを言われた。「神官さんを頼んできちんとお払いします」と答えた。神官さんも「大丈夫だ」と言ってくださり、お祓い、お清めをきちんとしてもらった。

埋め立てる前の菅原池には、一面蓮の花が咲き、鯉、ドジョウ、ウナギがいた。蓮の花ってこんなに美しいものかと子ども心に思ったことを覚えていて。何回か鯉釣りもした。南側の土手には大きなマーイシ（琉球石灰岩）があり、そこは深かった。

古来日本には自然崇拜がある。山、森、海などに神様がいると信じ崇拝する。火の神、水の神等々、極端に言えばありとあらゆるものに神様が宿ると。精霊、靈魂を信ずる、いわばアニミズムである。これは仏教でいう「山川草木悉皆有仏」である。このアニミズムは未開社会程濃厚であるとして、近代文明は蔑視してきた。特に西欧のキリスト教的文明観が世界のグローバル・スタンダードになってアニミズム

を非常に軽蔑するようになった。

西欧の文明観は、人間中心主義である。自然と人間の関係を考えるときに、自然は征服されるべきもの、人間のためにある、という考え方である。つい先日テレビ報道で、「人間は唯一神の子である」と信じ、主張している人々がいるのに驚いた。進化論を唱えたダーウインを迫害した思想が、この二十一世紀に、文明を自慢する欧米にあるとは、驚き、桃の木、山椒の木である。

山は神聖で、登るときは白装束で身を包み、「六根清浄」を唱えながら登るのが日本人。征服したと国旗を立て、胸を聳やかすのが西欧人。地球環境問題を考えるときに、人間中心主義か、山川草木悉皆有仏なのかでは、出発点が違う。人間中心主義は、害が人間に及ばない間はいいと考える。しかも害と利益を秤に掛けて利益が多ければ環境破壊行動を続ける、という考え方である。これのいきつくところは、地球もろとももの自爆である。

「自然保護」という言葉は、人間中心主義で、人間が自然を保護してやる、という驕り高ぶったような響きがある。「自然との共生」という言

葉には、対等という感じがある。自然に育まれ生かされているのに、ヤグミサ（畏れ多い）話しである。

「山川草木悉皆有仏」。全てのものに「靈、靈魂」が宿り、人間はそれらの諸々によって生かされている。使い終わつた針に「針供養」をする。正月二日にはちやんと道具祭りをする。海にこぎ出す自分の命を守ってくれる舟は「舟祭り」をする。命捧げてくれた熊に感謝の「イヨマンテ祭り」をする。山にも海にも神様がいる。そしてやがてその自然に帰っていくという慎ましやかな考え方に文明観を移行させていかなければ、四十五億年前に生まれた地球を、生まれてたかだか五百万年にもならない人類が、破滅させかねない状況である。

夜郎自大なドウダンミン野郎の戯言（たわごと）とお笑い召され。

平成十七年十二月。

太陽は神様

その昔、与論に大雨が降って水浸しになったそうである。私の祖父の家も水浸しになった。そのとき飼っていた豚は、大きな石の上に駆け上がって命助かったそうである。父はそのいわれのある大石を屋敷に移転したときに、一緒に運び、庭に置き大事にした。何の変哲もないが、五トンはあるうと思われる大石である。その石の上に、いつしかガジュマルが生えて、その根が大石を抱いている。ガジュマルの枝が繁茂しすぎたために枝を切り落とした。

ガジュマルの生命力はたいしたものである。大石の上に落ちた一粒の種が、石の割れ目にあるわずかな水を吸って根を伸ばし、割れ目割れ目に必死にわけいり、八方手（根）を尽くして葉を茂らす。葉は、空気中の二酸化炭素を吸い込み、根から吸い上げた水と太陽の光とを化学反応させて、ブドウ糖を作る。このブドウ糖をもとにして根から水と一緒に吸い上げた無機物や栄養分と化学合成をさせてタンパク質を作っていく。全動植物の栄養分のおおもとは葉で光合成によってで

きたブドウ糖である。

私も動物は、酸素を吸い、二酸化炭素を出す呼吸をして生きているが、植物は光合成によって酸素を出し、二酸化炭素を吸い、おまけに栄養素のブドウ糖を作ってくれている。植物のお陰様で我々は生きています。植物は何にも言わないが、拝むべきは植物である。

池田直也さんが発案して「ヨロン党」を立ち上げ、木を植えることをすすめている。敬意を表する。

我々が生きて活動するエネルギーは、もとをたただせば光合成によってブドウ糖の中に閉じこめた太陽の光エネルギーである。主食としている米にコメられている太陽の光エネルギーで生きている。

天照大神が日の神様として崇められる。合点である。

正月元旦に日の出を拝む。合点。

高山に登ってご来光を拝む。合点。

国旗に日の丸。合点。

太陽は神様。合点。

平成十七年十二月記

おてんと様

昔、悪いことをすると「天罰が下る」とみんな思っていた。「罰が当たる」という言葉がよく聞かれた。ドウダンミン男は、悪ガキだったから特別だったかもしれない。人は見ていなくても、おてんと様はちやんと見ているよ、と教え込まれ、悪さをしようとするときのブレーキになった。お陰で刑務所にも入らずに済んだ。目に見えない大きな力に支配された心の世界で、いつでも私を見ている絶対的なもの、それを「おてんと様」と言っていた。

NHKのプロジェクトXで、太陽光発電パネル板の開発研究ドキュメントをしていた。感動的だった。男は太陽を「おてんと様」ということを思い出した。

正月元旦に早起きをして、日の出を拝みに人々が行く。富士山に登ってご来光を拝む人もいる。太陽に今年一年の無病息災、家内安全、大願成就を祈り、柏手を打つ。太陽は神様である。

日本人は、お日様と「様」を付けて呼ぶ。お月様、お星様と「様」

を付ける。日本人の心が見える。

親鸞は言った。本当は、「みほとけとは光である」と。エネルギーである。「姿も形もおおわしませず」と。「阿弥陀仏の原語の一つである「アマターバ」(無量光)とは無限の光の化身、無限の時間、空間の意味です。光り輝く生命。その観念を、方便として形にしたものが阿弥陀如来という仏だと言われています。(五木寛之の本「天命」から抜粋)

この地球上のエネルギーは、全て太陽の光エネルギーがもとである。太陽の光が海に注ぎ、水を蒸発させ雨や雪となる。風や台風、海流ももとをただせば太陽。風力発電の風力のもととは太陽。太陽の光が植物の葉に降りそそぎ、光合成をさせて全ての食料のもとになる。全ての動植物を動かすエネルギーは、もとをただせば太陽。石炭石油は太古の生き物から。電気がつくのも自動車も動くのも、もとをただせば太陽の光エネルギー。太陽は神様。何万回拝んでも足りない。「天罰」観念が世の中をよくする。やはり「おてんと様」。

平成十七年十一月記

捨・拾

「こだわるとは、捨てることである」というのに出くわしたとき、にわかには意味がつかめなかった。ひとつにこだわるということはその他のものは全て捨てることである。「こだわり」を裏から見た言い方である。

目の見えない琴の奏者名人が、「私は生まれつき目が見えなかったから、ここまですなつた。」「目が見えていたら目移りして、琴一筋にはいかなかっただろう」と話していた。

「捨」と「拾」とはいくら違うか？

答えは「十」違う。「捨」は「拾」の中に「十」があるからと言ったら、子どもだましのなぞなぞになるだろうか。

「喜捨」という佛教用語からきた大人用語がある。貧しい人に施しをすることである。人に金品を与えることは喜びを伴う。九十七歳になる私の母は、子や孫、来訪者に「情け」といって年金から分け与え

ている。相手が受け取るのを渋ると「人の情けを断るものではない」と強制気味に押しつけてしまう。当惑する相手にドウダンミン男は、「年寄りを喜ばせるためにもらうてやってください」とお願いをする。いわれもなく人から金品をもらうのはいやなものである。なかにはそつと置いていく人もいる。母は与える喜びに浸っているのである。子どもは素直に喜ぶから喜捨になる。お年玉はその好例。与えるみかえりが喜びである。

お坊さんの托鉢行は、与える喜びを与えて回る修行である。物をねだつて回るとは乞食のすることでもとても恥ずかしくてできない。それを敢えてするのだから「修行」というのだろう。

人間は物をもらったことはよく忘れる。しかし人に与えたことはしぶといほど覚えていて、後になつても恩を売りたいがる。つまり受けることよりも、与えることの方が、人間には大きな幸福をもたらすということだ。

一遍上人は、捨てることを説き、「捨聖（すてひじり）」といわれた。

家も家族も国も捨てる。財宝、地位、名譽、名前も捨てる。捨てて捨てて捨てる。捨てることにこだわる。「捨てる」ことも捨てる。一切空。それができたら聖人。捨てるということは持っているからできない。何も持っていないければ捨てることはできない。捨てるためには持たなければならぬ。禪問答みたいでおかしくなってくる。

ドウダンミン男は、これと反対で捨てて拾って拾いまくる。拾うことにこだわる。まるで欲に手足を付けて歩いていっているようなものである。一生かけて求めてきたが見るべきものもない。

大晦日の晩に打ち鳴らされる除夜の鐘は、百人ある人間の煩惱を打ち払うため百人回撞かれるとか。佛教では、衆生の心身をわずらわせる煩惱は八万四千もあるといわれる。

大晦日の晩に百人の煩惱を打ち払い、次の年の大晦日にまた百人の煩惱を打ち払う。またその次の年も。

人間死ぬときは一切持たずに裸で死んでいく。火葬するようになって、三途の川の渡瀬銭も棺桶に入れないことになった。葬式に集まる

人数や飾り立てに差があるものの、それとて死んでいく者には何になろう。死は一切を捨てさせる。億万の富も名誉も、罪・汚名も。その時喜捨できるものがあるように、クンパラなくつちやドウダンミン男。

平成十七年四月記



人いろいろ

「天ヤウテューラチムイ、地ヤブギユウラチムイ（天は落ちると思え、地面には穴があき落ちると思え）」と与論の先人は教えている。平成十六年十月二十三日、新潟中越地震があった。火事を伴わず死者こそ数十人にとどまったが、村ごと避難したり、一時は八万人を超える避難騒ぎである。十一月十日現在、震度5の余震が続いており、おびえている。怖いもの、「地震雷火事親父」といわれるように本当に怖い。母子三人、車ごと山崩れに遭い、二歳の皆川優太ちゃんが四日ぶり奇跡的に助け出された。最初女の声の応答があったという。優太ちゃんに次に母親が助け出されたが、息絶えていた。ドウダンミンするに、優太ちゃんが助けられるのを見届けた母親は安心し、気力つきたと思われる。余震の続く中、消防レスキュー隊も命がけである。一つ石を取り除けば上が崩れ落ちてくるのではないかと、はらはら、どきどき、祈りながらテレビの生中継を見ていた。人間、て、ほんとにすごい。助けられた二歳の男の子の生命力も母親の気力もすごい。消防隊の使

命感もすごい。人間、て、ほんとにいいものだ、有り難いものだ。

阪神淡路大震災のようなどさくさの中で泥棒が横行しないのが外国人には不思議に思えるらしい。それというのは西欧諸国では当たり前のことだからである。イラク戦争の時、博物館の展示品が略奪にあっているのが放映されていた。日本はやはりいい国である。しかしながら、新潟中越地震で、義援金にかこつけて、金を振り込ませようとする詐欺が出てきた。世の中悪くなつた。人いろいろであるが、こんな悪い奴は人の部類には入れたくない。東京から与論に「おれ、おれ」と電話がかかってくる。「交通事故を起こした。示談金がある。」と続く。大和に子どもがいる人は気が動転する。この手でだまし取られるケースが続出している。便利になつたと思えば、悪賢さも深まり、上手、新手が次々と出てくる。

昭和二十八年、ドウダンミン男が名瀬にいたとき、ある青年が、金目当てで友達を山の中に連れて行って、青酸カリ入りジュースを飲ませた殺人事件があつた。一大ショッキングな事件で、名瀬の町は震え上がった。父親は有名な教育者で、大島教育事務局の先生だつた。即

刻職を辞した。後日和光園（^{ハンセン}）病患者収容所だった）に罪償いのために奉公したと聞いた。その頃、殺人事件といえればそれはそれは、大事件だった。今は、我が子をしかも一・二歳の子どもを殺す恐ろしい世の中になつた。やがては殺人事件がニュースにならない日がくるのではないかと……。ドウダンミン男の単なるドウダンミンで終わることを祈る。

香田証生という青年が、イラクに行き、テロ集団に拘束された。テロ集団は、「四十八時間以内に、自衛隊を撤退させよ、さもなければ、その青年の首を切る」と言ってきた。国の救出策もむなしく首を切られて放置された。死人にむち打つようなむごいことを敢えて言いたい。馬鹿なことをしてくれるものだ。甘っちょろい。結果どれだけ国に及び日本国民に迷惑を掛けたことか。今回、せめてもの救いは、両親が「迷惑をおかけしました」と詫びたことである。新聞の中には、「元々自衛隊を派遣した国が悪い」と非難しているのがあつたが、「お門違いじゃないですか」と言いたい。以前にボランテイアで行つた三人が拘束され、政府は八方手を尽くして救い出した。ジェット機をチャ―

ターして帰国させた。三人のインタビューの中で「またイラクに行きたい」というのがいた。それを聞いたドウダンミン男のはらわたは煮えくりかえった。「何にも分かつちやいない」。危険だからイラクには行かないようにという警告を無視していった三人。その三人を救い出すためにどれだけの人が、どれだけの苦勞、心勞、金を使ったか。いくら自分の行動を正当化するためであっても、「また行きたい」という言葉が出てくるとは解せない。あきれ果て、情けない。自己責任論、費用弁償論があつたが、どうなつたやら。

インターネット上で話し合い、初対面にもかかわらず5名の男女が車に乗り合わせ集団自殺をする。これも分からない。

人生いろいろ、男もいろいろ、女もいろいろあるけれど、いろいろある中で分からない「いろいろ」が増えすぎた。考えるとドウダンミン男の頭はパンクしそうである。

平成十六年十一月十二日記

信

ホテルやマンションの耐震偽装問題が出た。姉齒建築士が国の耐震基準を下回る設計をし、それを建築販売したというものである。設計者、建設会社、不動産企業、監査機関の四者がらみの事件である。耐震基準に満たないのが数十件発覚した。その中には、震度5程度の地震でも倒壊する恐れのあるマンションもあり、入居者は勿論、その周辺の住民に不安を与えた。

何千万円も支払って求めた生涯のマイホームを、ローンを背負って出て行かざるを得なかった住人は、「信」が「不信」に反転し、怒りがこみ上げたであろう。

「ホリエモン」の愛称で時代の寵児としてはやされたライブドアの堀江貴文社長が株価操作疑惑で逮捕された。多くの会社を買収し、過大評価させる虚偽の噂を流し、株を分割販売して時価総額七千億円の巨万の富を得た。社長の逮捕とともに株が急落し、二十二万人の株主に巨万の損害を与えた。

耐震偽装関係の建築士が一人、ライブドアの幹部役員が一人自殺したと報じられた。

平成十八年二月七日、秋篠宮妃殿下の懐妊が伝えられた。早速ベビ用品関係の株が上がった。

株価とは何だろうか？ 値段とは何だろうか？ 価値とは何だろうか？
お金とは何だろうか？ 信用とは何だろうか？

戦前、父と母は、営々と貯金をした。それが戦後は貨幣価値が百分の一に落ちて紙くず同然になったと嘆いていた。また、ある親戚の人は、土地を買った。父がその人に「早く登記しておきなさいよ」と忠告した。その人は、「私たちの間は心配はいらない」と言った。戦後、売り主が、「あの土地は、売れないから金は返す」と言って、戦前と同じ額面のお金を置いて行ったという。泣きごとと言っても後の祭り。

一万円の紙幣は、一万円の価値があるだろうか。人間の価値は給料の額だろうか。月給百万円の人は、十万円の十倍の価値があるだろうか。

か。東京の六本木ヒルズの建っている土地と与論の土地とでは、値段は一千倍ちがう。しからはば価値も一千倍違うだろうか。値段と価値は同じだろうか。

お金は、紙の上に文字と絵を印刷したものである。一万円札そのものはただの紙切れである。インターネット上で操作されるときには紙さえ存在しない。

株はネット上で売り買いされ、実体はない。一万円の紙幣には人々が、一万円の「信」を与えて価値が出る。紙幣や株には共通の「信」に裏打ちされて値打ちが出る。

ホリエモンは、空中に株価総額で巨万の富を築いた。「人の心は金で買える」と豪語した。彼の株券の裏には「信」ではなく「偽」があり、巨万の富は一夜にして霧消した。

「信」は「まこと」の読み方もある。人の世は、まさに「信なくば立たず」である。

何人たりとも、「信」の耐震偽装をしたらあかん。

平成十八年二月記

ひとの悲しみをわが喜びとする我は

アテネオリンピック（2004年）で日本は、柔道、水泳、女子マラソン等で金銀銅の過去最多のメダルを獲得した。金メダルはその種目の世界の頂点であるから偉い。上り詰めるまでに幾万の人を打ち負かしてきたことだろう。言い換えると負けて泣いた人が幾万もいる。

夏の高校野球は、国民を熱狂させる。地元・県の代表ということもあって熱を帯びる。この大会に参加する全国二千余校のうち、最後まで勝ち抜き躍り上がって喜ぶのはただの一枚で、残りの一九九九校は泣く。極端なことをいえば、一九九九校の涙の上に一枚の喜びがあることになる。負けて引き揚げるとき、選手たちは泣きながら甲子園の土を袋に入れていく。かつて愛媛県の池田高校が優勝したとき、踊り上がってはしゃぐ選手たちを、蔦監督は「いい加減にせ！」と言ってたしなめた。相手チームの悲しみをおもんばかつたのである。この監督だから、十一名しかいない野球部員を鍛え、全国制覇に導けたのだとドウダンミン男はいたく感激する。

以前は柔道の試合に勝つても、負けた相手の目の前で躍り上がって喜ぶことはしなかったが、今は拳を突き上げ、雄叫び、ガッツポーズをする。古い奴には武士道からはずれた感がある。西欧化の波、世の移り変わりだろうか。

大相撲では稽古を付けてくれた相手に勝つことを、恩返しというそ
うである。負けた相手を起こし、頭を下げる光景を見かける。大横綱
双葉山が安芸の海に連勝を阻まれたときには号外が出る騒ぎだった。
勝ち誇る安芸の海に、親方は、「次は、負けて騒がれる力士になれ」
と諭したという。かねて双葉山と親交のあつた吉川英治は、「江戸中
で一人寂しい勝ち相撲」と電報を打った。それを見た双葉山は大粒の
涙を流して泣いたという。

ドウダンミン男は困基キチガイである。相手のミスで勝った時でも
喜び、「ひとの悲しみを我が喜びとして生きている」と言つてはばか
らない。吉田茂首相は「人を食つて生きている」と言つてはばか
私は冗談でなくその通りである。人間の業である。意地汚いと思つて
も沸き起こる感情はどうしようもない。勝つ喜びを求めて負けの悲し

みを得る。生きている限りこの煩惱から逃れられそうにない。

勝負の世界では「勝った」「負けた」は当たり前、何の不思議もない。当たり前と言つてしまえば身も蓋もないが、ドウダンミンするといふ人の世の妙味というか、趣が感じられる。「優勝」の「優」は、「優しい、すぐれる、まさる」であり、更に分解すると「人と憂」で「人を憂える」となる。優勝は、「勝つて優しくなり」、「勝つて負けた相手を憂える」ことのようにだが、その域に達するのは至難である。賛成いだけますでしょうか。

平成十六年十月記

野次馬

「やじうま」は、「弥次馬・野次馬」と書き、「自分に関係のないことを人の後についてわけもなく騒ぎ回ること。またそういう人。」と広辞苑に出ている。

小泉総理大臣は、郵政民営化法案が、衆議院で可決、参議院で否決されたのを受けて衆議院を解散し、平成十七年九月十一日に総選挙が行われた。結果は、定数四八〇のうち二九六議席を獲得し、大勝した。選挙期間中何かと話題が多く、テレビを見る時間が増えた。特に民衆が面白かった。

臨時国会が招集され、小泉総理大臣の施政方針演説が行われた。その席上での弥次の多いこと。ときには演説がかき消されるほどの騒音である。何万という国民の支持を得た選良民のやることだろうか。怒りを通り越し、情けなくあきれてしまう。「弥次は議会の花」というのが議会ではまかり通っているそうだが、たまに機知に富んだピリットしたものならいいとしても、現在のそれは非難が多く品がない。

いやしくも国の総理大臣がこれからやろうとしている重要な施政演説である。静かに聴くべきである。ましてや特権を与えられた選良人である。

改革すべきは、あの弥次騒音である。国会議員の金バッジを付けた方々が、神聖な議事堂に入ると野次馬に豹変するとは？

演説の後各党党首へのインタビュウがあった。野党側の中に、全面否定、一文価値もない言い方があった。あれもいかなものかと。

さらに突っ込んだことを言うと、収賄罪や秘書給与詐欺を問われて辞めた人などが当選するとは、いささかあきれ、嘆かわしくなる。

自民党のキャッチフレーズは、「改革を止めるな」であった。郵政民営化に続き、小泉総理は国家公務員の削減及び給料削減を打ち出してゐる。大いに賛成。どんどんすすめてもらいたい。

家計が赤字になったら、先ず辛抱することを考える。社会保険庁の無駄遣い、官僚の天下りなど改革すべき事項は報じられていることだけでなく山積みである。

国民は言われるままに納税している。所得税、保険税、消費税、酒・

たばこ・ガソリン税など、重みにあえいでいる。改革をして税の軽減をしてもらいたい。

国会議員の人数も多すぎる。衆議院を四分の一にし、参議院を廃止する。先ずそこから改革すると国民は納得する。

いわゆる「隗より始めよ」である。ドウダンミン男の言うことなど、「犬の遠吠え」にもほど遠い。それでも「ああ！いっぺん言うてみたかった」。届きもしないドウダンミン男の弥次である。

平成十七年九月二十日



電池が切れた

小学校高学年の子どもが、デパートから生きたカブトムシを買ってきた。数日後動かなくなつた。その子は電池が切れたと言つて電池を買に行こうとした。

平成十五年佐賀県の小学六年生の女の子が、同じ学級の女の子を給食時間に別の教室に連れて行つて、ナイフで首を刺して殺し、平然と学級に戻つた。

平成十六年、小学校高学年の子どもたちに「一度死んだ人間が、生き返るといふことがあると思ふか」といふ質問をしたところ、「ある」又は「ない」と答えた児童は同数の三十四名で「分からない」が三十二名だつたといふ。

与論では八十八歳の祝いを、「トーカキ」といふ。「トーカキ」は米を一升マスに入れて量るとき縁切りをする四角い棒である。「一升」に「一生」を掛けてそれが満杯になつた。天寿を全うし、これでお祝いも終わりと云う意味をトウカキに象徴させて、記念品としてそれを

配る。

還暦の六十一に十二を足して七十三、さらに十二を足して八十五、八十五に十二を足すと九十七になる。私の母が九十七歳になった。与論では九十七になると「十三祝」というのをする。なぜ「十三祝」なのかというのと、「トーカキ」の八十八でお祝いは終わりとしたから、九十七のお祝いは子どもに戻って「十三祝」と言うことになる。赤いちやんちゃんこに、赤い帽子をかぶせて、一族郎党で寿ぐ。

今回私が、本土にいる兄弟などを呼んで、その「十三祝」をしようとしたら、母が猛反対した。反対の理由は、「お祝いはトーカキで終わった。子ども達や親戚に迷惑をかける。私が死んだら葬儀に来なければならぬから、その時は運賃がかかる」ということだった。私は逆に、「生きているうちに来てお祝いをし、死んだら寧ろ来なくていい」という考えである。母は、「死んだら、葬儀の時に、よそ様への体面がある」とも言った。そんなこともあるかな？と、ドウダンミン男は、考えてしまった。

先に挙げた小学生の意識を思うと、私も意識を変えなければならぬ

いと思うようになった。

肉親のいまわの際に大声で泣き叫ぶ「ユビクイ（呼び戻し）。病院ではなく自分の家だから、誰はばかりではない。大粒の涙を流して泣き叫ぶ。ほおに両手を当て、顔をくつつけて名前を呼ぶ。それが小一時間も続く。辺り一帯悲しみの缶詰になる。

死に水を唇にしたたらせる。まぶたを指で押さえて閉じさせる。訃報を聞いて、親戚が寄ってきてまた泣く。

亡骸をお湯で洗い清め、旅立ちの支度をする。死後の世界であるあの世は、この世と反対であるという考え方に基つき、作法が全て反対になる。お湯は、お湯に水を入れるのではなく、水にお湯を入れる。ひしゃくで水を掛けるときは、手をそり返させて掛ける。着物は左前に着せる。子どもの頃「パーー手（手をそらせてすること）」を厳しく戒められた。死に連動する忌みごとだからである。

納棺の時、ユングトウ（死者に言い聞かせる）をしながら、本人の愛用品、先に逝った肉親へのお土産品、三途の川の渡銭などを入れてあげる。そして生花をめでいいい一輪づつあげて「さよなら」をする。

その時はもう「泣き声のるつぽ」と化す。埋葬なら穴に埋めるとき、火葬なら焼き釜に入れるとき、決定的最後が来る。

与論では後二・三日の命、というときには、家にお供してきて、肉親に囲まれて臨終を迎え、旅立たせる。とてもいい風習だと思う。人間の一生の重大事である「死」。このような人の死に立ち会ったことのある子どもは、死んだ人を「電池が切れた」、「リセットしたら生きかえる」とは決して思わないだろう。

「死んだら帰ってこなくていい」という従来の考えを改めて、葬式には子や孫を呼び寄せようと思う。なるべく臨終に間に合うように。命の教育に必要なことは、死を体感させることである。死の葬送は単なる儀式ではない。また一つタマシ（魂・智慧）が入った。

現代の青少年の「命」を粗末にする風潮は、病院での死にあるのではないか。学校の机上で教えるのではなく、家庭で臨終に立ち会わせること、「泣かせること」にあるとドウダンミン男はダンミンした。

平成十六年十一月記

少年犯罪

平成十六年六月、長崎県の佐世保市大久保小学校で、六年生の女の子が同じクラスの女の子にカッターナイフで首を切られ死亡した。傷は深さ十センチ、幅十センチ。給食時間、相談室に呼び出されて殺害された。加害少女は、殺害後教室に来て「私の血ではない」と言った。動機は、自分のホームページに悪口を書き込まれ、やめろと言ってもやめなかったから、腹が立ってやったという。普段仲良しで、チャットと呼ばれるインターネット上の「会話」でのトラブルからだという。

山形県の中学校で、昼休み時間体育館で、ぐるぐる巻きのマットの中に男子生徒が逆さまに押し込まれ窒息死した。衆人環視の中で起こったのに、子どもの人権擁護ということで犯人の特定がはかどらないことが報じられた。殺された子どもの無念さはどうなるんだと、ドウダンミン男は、その時無性に腹が立って仕方がなかった。

栃木県の中学一年生が、二十六歳の女教師から「授業に遅れた」

と注意を受け、バタフライナイフでめった突きにして殺した。加害少年は普段おとなしく、突然「キレ」た。これ以来、「キレル」という言葉がはやり、突然暴走する意味に遣われた。

平成六年、大河内清輝君当時中学二年生が「もつと生きたかったけど」という遺書を遺して自殺した。金を万単位で何回となく取られ、川に突き落とされる等のひどいじめのあげくだった。全国的にいじめが問題になった。

鹿児島県の知覧町の中学三年生もいじめにあつて首つり自殺をした。県内の九十六市町村の教育長が招集され、事件の概要や再発防止策の説明を受けた。知覧町は武家屋敷のある静かな田舎町だけに、与論もよそ事ではないと危機感を覚えた。少年犯罪は、都会、田舎を問わない、しかも男女を問わず低年齢化している。

いずれも思つてもみないビックリ、ビッグな事件である。

日本の国は世界一安全安心な国というのが自慢だったが、今やとんでもない犯罪国になりつつあるように思えてくる。特に聞くに堪えないのは、幼児に対する虐待や殺害である。生みの親や母の情夫

に殺されるなどは人間世界のこととは思えない。実の母親に虐待を受け泣き叫ぶ光景を思うと、身の毛がよだつ。殺されるなんぞは、どんな思いをして死んでいったのであろう。

何が狂ってこうなったのだろうか。「焼け野の雉夜の鶴」といわれるように、動物でさえ命なげうって子を守るのに。

道端や街角に水子地藏が建てられ、花が手向けられる心の優しい国だったのだが。

平成十七年七月記

反哺の孝

静岡の女子高校生が、母親に猛毒の^{タリウム}砒素を飲ませ毒殺しようとした。動機は、母親の苦しみ様を見たかったから。しかもその様子をホームページで公開していたという。この女子高校生は、成績優秀で、毒薬の知識を持っていた。男は^{タリウム}砒素が猛毒とは知らなかった。

近年、意味不明の青少年凶悪犯罪の多いこと、全く驚きである。犯罪の低年齢化の進むこと驚きである。動機とされる内容が驚きである。日本の国は、どこへ行っても一つの国語で通じ、安全と水はただと思われていた。今では親殺し、子殺し、友達殺し、安全安心の牙城である家庭でさえ、何が起るか分からなくなった。

ある大人と高校生の座談会で、高校生が大人に「なぜ人を殺してはいけないのですか」という質問をした。大人はたじろぐばかりで答えられなかった。考えてもみなかったことだったからだろう。

「子どもは育てたように育つ」。子どもたちの問題は、親の世代にその因がある。その親のさらに親世代は、戦後日本の申し子である。かく

申すドウダンミン男、その因の因の世代である。三世代の因果のめぐりか。さらにその上の世代は、教育勅語を強制的に暗唱させられた。いやが上にも「忠」、「孝」をたたき込まれた。昭和二十年八月十五日を境にして写真のネガのように白と黒が反転した。忠、孝は罪人になり、息を殺して生きねばならなくなった。

地上を睥睨（へいげい）し、悠然と飛ぶ鷲は、食べ物を口に入れて半分消化してから口移しにヒナに与える。いにしえの人は、成長してから、育てられた恩を返すことを「鳥に反哺の孝あり」と教えた。禽獣に家族愛あり。「父母二孝二兄弟二夫婦相和シ」。

よもや、「なぜ親を殺してはいけないのですか」という質問はあるまいが。ワーウイヤクワーギ、クワーギ

平成十七年十一月記

教育勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ
我ガ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此
レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ
兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ
修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓発シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開
キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無
窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス
又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顕彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所
之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳拳
服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

戌・犬

今年（平成十八年）は、戌年である。干支でいうと丙戌である。

犬はよく人になれ古くから関わりが深い。ペットや番犬として飼われている。犬は人につき、猫は家につく。犬は三日飼えば一生恩を忘れず、猫は三日で忘れるといわれる。

東京渋谷駅前の忠犬ハチ公は有名である。忠君愛国の時代背景にのり、「公」の名譽号までついている。主人が死んだ後も迎えに通い続けたのは、忠誠心の「ナンバーワン公」としてもてはやされた。

もう一つ、東京上野の西郷さんが連れてくる犬も親しまれている。ある家の道路脇に番犬がつながれていた。ほろ酔いで歩いているといきなり吠えられた。びっくりした。その家に入ろうとしたわけではなく、天下の公道を歩いているのに、文句があるかと思つたので吠え返した。すると飛びかからんばかりに吠え返してきた。以後はその近くに來るとなるべく足音立てずに、離れたところを息を潜めて通るのだが、気づかれて吠えられる。道を通る人に吠えさせる飼いはいか

がなものかと思う。飼い主には吠えられる人の気持ちなど分からないようである。

「猛犬注意」の札のかかった家を訪問すると、犬が吠える。その主人が出てきて吠えるのをやめさせる。泥棒呼ばわりが止んで安堵するが、主人にすまない風はなく、平然とされると、こちらがお礼の一言でも言わなければならぬようなバツの悪さを感じる。

チンのような小さいものなら愛嬌だが、人をかみ殺しそうな大きな犬の場合は恐怖を感じる。郵便配達が、その家の犬にかまれたニュースを聞くことがある。多額の慰謝料があつてしかるべきである。「犬の放し飼いをしないように・・・」という町内放送が時々ある。論外。

犬の嗅覚は人の二千倍も強いそうである。その特性が、狩猟犬、警察犬として、獲物や犯人探しに使われている。悪事の多い昨今、大いに犯人を嗅ぎつけてもらいたい。「犬のお巡りさん」という童謡がある。孫と一緒に愛唱している。盲導犬の奉公ぶりは敬意さえ表したくなるくらいである。

人の隠し事をかぎつけて告げる者を「犬」と呼んでさげすむ。犬に

とつてはいい迷惑である。ともあれ、犬は飼い主次第。ワン・マン勝手なのはマンの方である。

去る十七年は、小学一年生の女の子が誘拐殺害されるといふ悲惨な事件が連続二件もあつた。女子高校生が実の母親を猛毒のカリウムを使つて殺害しようとした事件、聞くに堪えない幼児虐待事件、ホテルやマンションの耐震偽装事件等考えられない悪事が多かつた。我が与論でもあつてはならない事件があつた。

平成十八年は、いいことがワンさであるように。

世の中、ワン、ワン、ワンダブルでありますように、祈グワン申しあげます。

平成十八年戊年正月記

物差し

物差しは変わらないものだと思っていた。番匠金といえど正確無比を表す。「あの人は番匠金だ」と言えば、融通が利かないというおちよくりにもなる。

ある小学生が、竹の物差しを使っていた。担任の先生が、めずらしいものを持っているのね、誰にももらった？ときいた。おじいさんから。物を大切にする人だねと言った。その子の頬がゆるんだ。周りの子の目が変わった。

人生八十年、長いという人もいれば短いという人もいる。恋人を待つのは、五分間でもものすごく長いと思うのに、会っている時間は短く、時間よ永遠に止まれと願いたくなる。

九十七歳の私のパムイ（老婆）は、朝起きるなり「早く連れて行ってくれ」とウヤヤーブジに額ずくのが日課だった。「親孝行はしたつもりだが、何でこんな苦しみを与えるのだろうか」とグチツツていた。

「まだ見ぬ明日香へ」の著者・井村医師は、癌に冒されやがて生まれ

てくる我が子の顔を見ることなく死んでいくことを知ったとき、世の中が一変して明るく見えたという。家族や周りの人々に感謝の念がわき起こり、残り少ない命の時間がこの上なく満ち足りていたことをその著書に綴っていた。

与論十五夜踊りに、「二十四孝」の演目があり、概要は次のようになっている。じいさんが三人の子どもを次々に呼んで話す。「歳が八十を超し、齒がなく食べ物か思うように食べられないので、あなたの子どもを殺して、子どもの飲んでる乳を私に飲ましてくれんか」と。長男と次男は、「余命幾ばくもない命と愛しい我が子が代えられるか、とんでもない」と断る。三男は、「妻に相談してみる」と帰る。妻のミトウガネは「子どもは産みかえられるが、八十余りの親ガナシは二度と拝めない」と言う。それを聞いてじいさんが「三本松の下にミトウガネと坊やを連れてきて穴を掘れ」と指示する。そこから金銀財宝が出てくる。「ミトウガネと坊やに与えてお祝いしなさい」で幕。兄弟で物差しが天と地の差がある物語である。

「芋を作つてニイコレ、パーコレ（芋を作つて根を食べ葉を食べ）」と

いう与論の諺があるように、芋は救荒食物で、戦後これを食べて育つた。芋は干ばつに強いうえ、誰にでも作る事ができる。他の雑草にもめげず繁茂する。その生命力にあやからない手はない。今もドウダニンミン男は、芋の葉を味噌汁に入れたり、酢みそで食べる。ほんのり甘みがあり柔らかくておいしい。そのことを人に話すと、さげすんだことを言う人、同情的相づちを打つ人、様ざまいる。かつて薩摩武士を芋侍と馬鹿にした。今は芋焼酎が人気で、原料の芋が品不足である。芋が健康食という研究が発表されるとたちまちブームになる。

ニビル（野蒜）がおいしいと言ったら、「貧乏くさいことを言うな、品が落ちる」とたしなめられた。有村治峯翁が「ニビルを与論の特産品にしたら」と言った話をしたら、納得ぎみだった。ドウダンニンミン男が言う「品が落ち、有村翁が言う」と特産品になる。

「ヨウシャドウ マサ（ひもじさがおいしさ）」と先人が喝破したように、同じものと同じ人が食べてもときによって異なる。

物差しが伸び縮みする。物の価値を計る物差しは、人の数ほどあるし、それが時と場所によっても伸び縮みする。そんなこと当たり前だ

とおつしやる人は尊敬申し上げる。ドウダンミン男は、未だに自分の物差しが正しくて、しかも普遍的なものと思つたりする。思い通りにならない悩みは、自分の物差しにある。

佛教の「色即是空　空即是色」、これが究極の物差しに思える。

しかし、ドウダンミン男にはとうてい及びもつかないから、常にドウダンミン、日々ドウダンミンで生きていくしかない。笑われようがどうしようがドウダンミン。

色即是ドウダンミン

日々是ドウダンミン

平成十六年十二月記

天気予報

テレビの定番は、スポーツ、株式、天気予報の三つである。

晴れると「いい天気ですね」と挨拶する。日本は、瑞穂の国で天照大神を祭る。天照大神は女性で、太陽である。ところが、砂漠地帯やアラブの国では、太陽を悪魔と呼ぶ。

与論十五夜踊りは、旗は龍神、竿頭は稻穂、そして一番目に「雨賜れ（アマタボーリ）」を歌う。年に三回ある与論十五夜踊りで欠かすことのないのは、この「アマタボーリ」で、どんなに天気が荒れてもこれだけは必ず奉納される。与論島にとって、雨は天からの「賜りもの」で、雨が降ると「ユガプータバーチ」という。これは天に對する畏敬の念からだと思う。

切り干し大根を作るには北のからっ風がいいし、漁師が海に出るには風がいい。天気予報官は決して「いい天気、悪い天気」とは言わない。納得でしょうか。

風が吹けば桶屋が儲かるという。「風が吹くと砂ぼこりが目に入り

盲人が増え、盲人の弾く三味線に猫の皮が使われるから、猫が狩られ、鼠が増えて桶をかじるので、桶屋が繁盛する。」世の中回り回つて、思わぬ結果になる。

NHKの天気予報が当たらないと愚痴をこぼす人がいるが、予報や予想というのは当たらないためにある。ご承知おきを。

天意に貴賤美醜の区別なし

風はものを吹き飛ばす。だが風が吹き飛ばすのに、貴賤美醜の区別はしない。雨は降りそそいでものをぬらす。だが雨が降りそそぐのに、大小強弱の区別はしない。風雨はこの上なく公平無私で、あらかじめ意図された方向など持っていない。それで、人は風に吹かれ雨に降られても恨みはしない。

台風も天意

厄介者扱いされる台風であるが、雨をもたらすから損害ばかりで

はない。熱帯地方の熱い大きなエネルギーを北へ運ぶ。黒潮などの海流も天意によるエネルギーの配分である。

雷・稲妻だって天意である。稲妻によって害虫が殺される。稲妻はまた空気中の窒素を分解して雨と一緒に地中にしみこませる。無線塔の下の麦畑には肥料を入れなくても実る。

神社の入り口や神棚にしめ縄を張るのは、神聖なところの表示である。しめ縄は、真ん中が太く、両端に細い藁が二、三本下がっている。太い本の縄の部分が雲、細く下がっている藁は雨。紙を切って下げた白い四手は、稲妻を象徴している。雷の衝撃は、稲穂の受精を促進するという人もいる。稲妻は「稲」の「妻」と言うから納得である。一方「かみなり」は「神鳴り」だとして天の神様が怒った怒鳴りだと恐れられてもいる。

人為は天意に反する？

NHK鹿兒島の天気予報は、和泊町と伊仙町の天気を予報している

(平成十六年現在)。沖永良部島や徳之島ではない。我が与論など全く無視である。公平公正を公言するNHKが、それは無いじゃないかとドウダンミン男は言いたい。交代して与論も出してもらいたい。アフリカの一角で発生したエイズが、あつという間に、世界に広がった。何がはやらしたか。それはジェット機である。ジェット機が世界各地網の目のように飛び交いまき散らした。世界中を飛び回っているビジネスマンや観光客のために世界の天気予報が毎日出されていく。ニューヨークに傘を持っていけ、パリにはセーターを準備せよとか、世界も狭くなつたものよ。ことほど作用に、今や地球は一つ。地球という舟に乗り合わせた運命共同体である。

「チュプニ、ヌイオウトウテイヤー(一つの舟に乗り合わせた運命共同体)」を世界標語にしたいものである。

平成十六年九月記

チンダミ

男の子が生まれたら、その子が年頃になって弾く三味線を作るために、桑の木を育てたという話を、遠い昔聞いたような気がする。

昭和二十五・六年頃、先輩の後を追って「アシビンチュ」に行つた。

先輩は、缶詰かんかんに棹をつけ弦を張り三味線を作つて弾いた。一つ年上で十五・六歳だったがとてもうまかつた。歌を聞くとすぐにそれをはじいた。見よう見まねで覚えたものだけに、天才に思えた。

弾く前に必ずチンダミ（弦の調整）をする。チンダミをしてもらつて、「白地に赤く」の所まで教えてもらつたが、弾けたのはそこまでだつた。どれがドの音か判別がつかず、自分には才がないことを悟りあきらめた。

食欲、性欲、睡眠欲は人間の三大欲望といえないだろうか。これは人間のみならず動物の種族保存本能に思える。神様は、食欲、性欲、睡眠欲には自動制御装置（自動ブレーキつき）をつけて作りたもうた。食欲は、満腹になると自動的にストップがかかる。性欲は、過ぎると

不能になる。睡眠も過ぎると眠れなくなる。動物は、この神の摂理にかなった行動を取っている。そしてこの三つで事足りている。

やっかいなのは、これだけで事足りず、どうにも止まらない欲望が人間様にはくつつついていることである。

毎日毎日芋ばかり食べていると、たまにはご飯が食べたい。ご飯ばかりだと、たまにはパンが食べたい。同じパンでももつとおいしいものが食べたい。チーズパンが飽きるとチョコレートパン、さらにはブドウ、メロン等々限りなく広がる。食欲を満たすために金が欲しい。この金欲しさの欲望は際限がない。こうした付随的高次の欲望が肥大して、「欲望」に目鼻口や手足のついたぶよぶよの人間になる。

キリスト様は、人間は動物とは違い、神様によって作られたとした。そのため、ダーウインが人間は猿と同じ祖先から進化してきたと「進化論」を発表したとき、大変な迫害を受けた。

ドウダンミン男は、キリスト様とは逆で、人間を含む動物を神様が作り、そこから人間が勝手にみ出したと思えてならない。

お釈迦様は、肥大した欲望、派生した諸々の煩惱をコントロールし

ようと大変な苦勞をされた。

人間は、自分たちでブレーキ装置、コントロールシステムを作らなければならなくなつた。

物心ついた赤ちゃんから、我慢をしつけ（つまり躾）、倫理や道徳を説く教育をしなければならなくなつた。法律を作り、守らせる力ずくも必要になつた。問題を解決すると結果が問題をはらみ、また解決を要し、とこちらも際限がないように、ドウダンミン男はうつつとしくなる。

欲望のチル（弦）は張り過ぎても、ゆる過ぎてもいけない。三味線のチンダミはできなかつたが、欲のチンダミはしたいと思うが、これがまたなかなかできないドウダンミン男である。調子パンカーだが、チンダミ、シー、シー、渡らな浮き世である。

平成十六年十二月記

無財の七施

無財の七施とは佛教用語で、財力はなくても誰でもが誰に対してもできる布施行である。眼施、顔施、身施、言辞施、心施、床坐施、房会施の七つの施しをいう。

眼施 〓 優しい愛のまなざし

顔施 〓 笑顔（和顔）、不快な表情を与えないこと

身施 〓 自身を正しくして、人に礼を尽くすこと。身だしなみを整え、

不快な振る舞いをしないこと

言辞施 〓 人に柔和な言葉で接し、粗悪な言葉を与えない（愛語）

心施 〓 愛情のこもった心で相手に接すること

床坐施 〓 座布団などの敷物を与えること、座席を譲ること。

房会施 〓 部屋や家屋を、他人と温かく接する場所にしていくこと。

この言葉に出会ったとき、感動を覚えた。

以下のような無財の七施をいう人もある。

- 一、目を向けてやれ
- 二、声をかけてやれ
- 三、耳を傾けてやれ
- 四、息をかけてやれ
- 五、手をかけてやれ
- 六、顔を出してやれ
- 七、知恵をかしてやれ

何はなくても、誰にでもできるといわれてもそうそうできるものではない。布施行、修行といわれる所以（ゆえん）である。

「なりふり」をよくすることは、立派な布施である。「なり」は身なり、「ふり」は振る舞い。身ぎれいにすることは見る人に好感を与える。きれいな女に出合つて悪い気持ちのする男はまずくない。しかし、「きれいだ」と誉めたら、その人に目をむかれたことが何回かある。

化粧をしたり、きれいな服を着ることは無財ではできないが、振る舞いは心がけでできる。子どもの時からやしつけでできる。「躰」は「身」の「美」であるが、振る舞いは身を美しくすることなんだろう。「ふり」は、人格を高め、品格へと押し上げていく。

ある家庭では朝起きて顔を洗うと、鏡に向かって三度「にこつ」と笑って、はれぼったい顔をほぐし、明るい声で「おはようございます」と挨拶して食卓につかせる躰をしているという。顔施、言施を親子家族からということである。自らは明るい一日が約束されること請け合ひである。

ある大会に天皇陛下御一家が出席していた。秋篠宮殿下が幼い頃、テーブルの上のほこりを払った。それを美智子妃殿下がたしなめたという記事を読んだ。これは、君子の大会関係者に対する隠れた布施かと男は思った。

大勢の人が集まる与論の葬式では、上座はがら空きの場合がある。上座をすすめてもなかなか動いてもらえず、関係者は困る。それでド

ウダンミン男は、上座の空いているところにすすめられもしないのに自分からいつて座る。身の程知らずのおごりと見るか、配慮と見るかは分かれるところである。

ともあれ、無財の七施があることを知っただけで、人間が大きくなつたような気がする。さらに心がけて実践していければふくよかになれる。挨拶すれば挨拶が返ってくる。笑顔をむけると笑顔が返ってくる。これ人の世の情理である。施すことは施されること。見返りを期待した施しは、それがなくなるときには恨みになる。仏心が鬼心に変わる。無財の七施は、一方通行の仏心から発するものでなければ意味をなさないのは言わずもがなのことである。

平成十七年一月記

我以外皆師

これは吉川英治の言葉である。吉川英治は、尋常高等小学校を貧困のため中退し、店員、職工、給仕などの下積みの仕事をしながら刻苦勉強、独力で小説家となった。NHKの大河ドラマ「宮本武蔵」の作者である。

印刷工場に勤めているとき、そこにあつた百科辞典を五十回も読んだという。大学教授が居並ぶ席で、誰一人知らないことを、吉川英治のみ知っていたという逸話がある。さもありません。我以外皆師」の言葉は、吉川英治が言ったから、彼の生き方に裏打ちされて輝き愛されている。

これを反対から見ても「我もまた人の師」として、自分の生き方の指標にしているという人がいた。これは威張っているのではなく、自分の生き方をたださなければという自戒である。これもなるほど。与論の学校に子どもを赴任させた、与論出身のある識者が、「与

論の人は後々まで、その人がしたことをサタ（話題にする）するから、しつかりしなさい」と厳しく言いつけたといっていた。人は良しに付け悪しきに付け、人を見て我が身をただしていく。

戦前、教員養成学校は「師範学校」といつていた。これは「範」を示す師の学校という意味であろう。

人が見て学ぶのは、人のなり振りばかりではない。山川草木皆師になる。岩頭に生えている蘇鉄を見ては、悪条件に耐えて繁茂している姿に勇気づけられる。年中変わらぬ松の緑に生気を感じ、散るも一緒の双葉に夫婦の愛を思う。庭に石を飾って朝夕眺め、心和ませる愛好家がいる。

「行楽一如」は、父茂徳が師範学校在学中に教わり、座右の銘にしていたものである。「行」は、修行、勉強、仕事を指し、それを樂しみとして生きることを用いるのである。

論語に、「子曰く、これを知る者はこれを好む者にしかず、これを好む者は、これを楽しむ者にしかず」とある。知ると言うことよりは「好きだ」と言うことの方がいい。好きな人にはかなわない。

「好きだ」という人は「楽しんでいる」人にはかなわない。人生そのものがそうありたい。

人は学ぼうという気持ちがあれば、どんなものからでも学べる。吉川英治は、我以外をみんな師にして学んだ。それで、東大を出た大学者よりも多くを学び、身につけた。敬服の極みである。

「学ぶ心のある者には、全てが師になり、学ぶ心のない者には、師はない」

平成十七年一月

鮎心（たごころ）

花嫁、花婿に贈りたい言葉、それは「鮎心」である。

《鮎の特性》

- 一、鮎は、周りの色や形に自分の体の色や形を変えて身を守る。
 - 二、骨がなくどんな形の穴にも自分の形を変えて入り込むことができる。骨のないのが生き骨。変幻自在の名人である。
 - 三、八本の手には吸盤を持ち、吸い付いたら離れない、離さない。
 - 四、いざというときには黒墨を出して煙幕を張る。
 - 五、泳ぐときはロケット式でスマートである。
- 鮎は敵を撃退する強力な武器を持たない。そのため周りの色に自分の色を合わせて身を守る。
- 花嫁及び「嫁ぐ」の「嫁」という字は、「女」が「家」についた形になっている。嫁は、嫁ぎ先の家風になじみ、色になることである。当世の男女共同参画型社会、とりわけウーマンリブの方々から袋だたきに

合いそうであるが、そこはドウダンミン男のドウダンミンである。

「過去と他人は変えられないが、自分と未来は変えられる」、その通りだと思ひ、人生訓にしている。他人を一生懸命変えようとして跳ね返され、惨めな思ひをする。自分は変わらぬとして、他人を変えて自分に合わせてもらおうとするところからトラブルになり、悲劇が始まる。嫁と姑の確執、家庭内の不和・不幸はここに端を発する。

右も左も切り立つ断崖、ひとりかやつと通れる「戻り道」というのがある。そこで出合ったら、どちらかが戻らなければならぬからである。人生にも「戻り道」がある。そこで出くわしたらどちらかが身を引かざるをえない。負けるが勝ち、自分からさつさと戻るところに平安がある。そこで出合ったのが若者と老人だったら、若者が戻るのが理の当然。強い者と弱い者だったら、強い者。戻った方が徳が高い。鮪に周りの色を変えることはできない。自分の色を変えて何事もないが如くに坐っている。周りに合わせるのを笑わば笑えである。色を変えられることができるのは、変えないこともできる。

花嫁の白無垢は、どうぞあなた好みに染めてくださいとの意思表示

と聞いた。

「糠三合ある間は入り婿になるな」と、昔言われたそうである。

男尊女卑の考え方が強かった昔、極端な言い方になるが、男が自己を無にして、その家の色になることの難しさ・悲しさを言ったのだらう。勿論、三顧の礼をもつて迎え入れられる婿が大部分であったことはいうまでもない。人間が自己否定をし、自分を無にして相手の色に合わせることはなかなかできることではない。できる人は聖人である。しかし、平安を求めるなら努力しなければならぬ。そのことができない度合いが大きいほど、家庭の幸福度が大きくなる。

鮪は、こともなげにそのようにして、何億年もの昔から生き続けてきた。その生き様は見習いたい、と言えば笑われるだらうか。

とりわけ変化の激しい現代、将来に渡って変化に対応し、素早く自己を変えて生きていく。鮪は与論語で「タフ」という。凶太く強靱なことを英語で「タフ」という。この世は、タフでなければ生きていけない。イツヒツヒヒー。

平成十七年七月七日記

花嫁

男に二人の娘がいた。お陰様で二人とも嫁いでいった。一人は与論に、もう一人は東京に。結婚披露宴で、父が娘の手を引き、バージロードなる花道を通り、花婿に渡す場面がある。嫁ぐ娘が「今まで育ててくれて有り難う。これからは〇〇さんとやっつけていきます」という趣旨の挨拶がある。常套句であるにしても、言われた父親は「ほろつと」する。涙もろいドウダンミン男は、衆人環視の中で涙を流すみつともない様を見せまいと必死に平然を装う。嫁がせると人並みの道の緒に就いたとやはりほつとする。

私が小さい頃、母は「タビンチュ トウジ ヤ バー」とよく言っていた。理由は与論語が通じないから大和口をしなければならぬ、気心が主だった。祖母の時代は、同じ島内であつても遠いところは、大変だと思われていた。道は石グツチャラで狭い。車がないから荷物を担ぎどこまでも歩きである。裸足で石につまづき爪がはがれたり、転んだり。私も牛道を何回か歩いた。昼はいいが夜は難儀だった。

ここ数十年來タビンチュトウジがぐんと増えた。遠くは北海道から。現地で結婚してUターンしてきたもの、与論にいて迎えたものなどあるが、与論にいて知り合いになり結婚したものが多し。私が知る限りにおいて、その奥さん方がよくなじみ、よく働く。働き者ばかりで、ドウダンミン男のイメージを遙かに超えて立派である。なるほどこれなら・・・。むしろ・・・。

国際結婚（近年この言葉はあまり聞かない）といわれる、外国から嫁を迎えるのが与論でもある。今年（平成十六年）二組が誕生した。聞くとやはりインターネットで知り合つてゴールインしたという。距離、国境、言葉、生活様式、人種の壁を越えた波が足下に押し寄せてきた。今昔の感が深い。縁は異なるもの、今昔変わりない。

「タビンチュトウジ ヤ バー」という言葉は絶滅した。

結婚式を与論では「ニービキ」又は「ミービキ」と言つていた。沖縄では、ニービチ（根引き）と言つてゐる。以前は〇〇家と〇〇家の結婚式と言われて家と家の縁結びが主だったが、戦後は本人同士の結びが中心になつた。「ニービキ」は「根引き」。「ミービキ」の「ミー」

は「新しい」という意味があるから、「新しいひき・親族」だともドウダンミン男には思える。吉川英治の詩に「菊根分け、後は自分の土地で咲け」というのがある。

与論の土地でサツチャブリテイ（咲き誇って）もらいたい。

平成十六年十月記



チヌパンチチャ

チヌパンチチャとは、海にいるエビのシヤコのことである。大きな鋏を持っていて、その鋏でパチン、パチンとはじく。取つてかごに入れると元氣よくはね回る。女の子が不作法にしゃべり、跳ねるのを、やや蔑笑氣味に「チヌパンチチャ」と言う。じゃじゃ馬に似た表現である。「ヲウイガバンチカ」は、男みたいで女らしさがないという意味である。言われた女の子は、反撃してきた。男の子はこの言葉でかかった。アバシ（針千本）は突くとふくれて針を逆立てる。これにちなみ、ちよつとしたことでふくれ面をするのを「アバシ」と侮った。「箱入り娘」は高貴な娘の尊称だったが、今では世間知らずという意味に変わってきた感じがする。

高校の男子生徒に家庭科が課され、家事育児を習う。大いに結構である。男にも産後休暇があり、育児休暇もある。結構である。人が作る制度だから、世につれ変わる。古い男はとまどいながら行って行く。平成十六年のアテネオリンピックへの派遣選手は、女性が男性の数

を上回った。看護婦はなくなり、男性もなれる看護士になった。保母も保育士になった。男女共同参画型社会の構築、結構、結構、賛成、賛成、大賛成。

活発な女性が評価され、チヌパンチチヤは死語になりつつある。反対に男性の女性化が目立つ。男性が髪の毛を染め、ピアスをする若者がいる。これはいただけない。昔は女性の髪は黒髪が尊ばれた。カラスの濡れ羽色と黒いほど美しいとした。そんな観念しかない古い男は、茶髪のはやり初め多大な違和感があったが、だんだん慣れてきた。

ジェンダーフリー（性差なし）の過激な活動家は、性差を全く認めないことを主張する。「女らしさ、男らしさ」という言葉を差別だとして攻撃する。男と女は、身体的、生理的な違いがあるのだから、差別ではなく、区別として両性の特性は尊重しあわなければならない。女性が男性化し、男性が女性化して性差なしになるのは、はき違えである。

アメリカでは、同性愛者の結婚を認めるか認めないかということが大統領の政策争点になる。実際に認めている州もあるという。ドウダ

ンミン男には理解できない。養老猛は、「バカの壁」の本の中で、「話せば分かるというのは嘘だ」と言っている。これなどは、いくら話しても分からない。

チヌパンチチャもフウイガバンチカも早く死語になって、男勝りな女性が続出することが望まれる。町会議員も半数は女性であることが正常な社会だと思う。日本銀行が平成十六年十一月一日（この原稿を書いているとき）に発行した五千円札にはじめて女性の樋口一葉が登場した。一万円札に美しい女性を載せるとドウダンミン男、大事にしまい、金持ちにならないかなあ！

平成十六年十一月記

兄弟は他人

「兄弟は他人の始まり」という諺がある。物心ついてからこの言葉を聞き、そんなことあるかなあ？いやだなあ！とその意味がよく分からず、信じがたいまま過ごしていた。

名大関とうたわれた貴乃花は、百二十キロ足らずの細身の体で、常に真つ向勝負を挑んで優勝もした人気力士だった。引退してから二人の子を横綱に育て上げ、大相撲に絶大な功績を遺して平成十七年に亡くなった。

その二人の子、元横綱若乃花と貴乃花が遺産・跡目相続で民間テレビに大げさに騒ぎ立てられている。兄弟だから、元横綱だから、知名度抜群だからメディアの格好の餌食になったかもしれない。高い人格を有する称号の横綱だけに醜い争いは残念である。

この種の報道は、メディアの煽り立てでもあると思われる。バックには、それを好む大衆がいるからである。

煽り立てと言えば、ドウダンミン男が小学生のとき、なんでもない

のに、周りに仕掛けられて友達と殴り合いの喧嘩をした苦い思い出がある。どっちが勝つか見物しようという悪戯鬼どもの仕掛けに二人とも乗ったわけである。

NHKの大河ドラマ「義経」は兄弟の確執を描いた人間ドラマである。結末は、強くなった弟義経を兄頼朝が警戒して殺すというものである。大河ドラマや歌舞伎その他でしばしば取り上げられる国民的人気の演目である。

兄弟仲良くの有名な話に、毛利元就の「三本の矢」がある。男の子三名を座らせ、「一本の矢は折れるが、三本合わせると折れない」という実体験をさせ、三名の兄弟が力を合わせて毛利家を栄えさせなさいと訓えた。ときに反目、相争うことがあるからである。

『兄弟は「仲良く」と『兄弟は「他人」』の「仲良く」と「他人」は裏腹である。裏は背中、背骨がある。腹は前面でオツパイがある。ひとりの人間の中に裏腹ある。兄弟は腹をみせて仲良く、背中を向けて他人。前面のオツパイを、兄も弟も同じように吸って育ったから、他人と区別する仲の良い兄弟。背中合わせになると相反する他人。「仲良

く」は、「他人」と背中合わせであるから道德律として教えなければならぬ。

ドウダンミン男の三名の孫（五歳、三歳、一歳）は、兄弟でよく喧嘩をする。どちらの味方もしようがなく、男はただオロオロするばかり。まもなくどちらかが泣いて決着する。

同じ親の血を分けて生まれても、全く同じではない。やがて結婚すると他人が混じる。その間に子どもが生まれるとその分欲望が膨らむ。与論でも遺産をめぐる喧嘩・訴訟を聞くことがある。

与論の諺に「兄弟は他人」とある。兄弟が背を向けたときのことである。ドライな言い方だが「他人の始まり」よりすつきりして核心的である。

さらに突っ込んで「我以外皆他人」はいかがだろうか。

「人々人間」ではない。人間は「人の間」であって、人ではない。「間」には、愛、憎、好、嫌、礼儀、信頼、利害、損得、義理……。間にあるものによって親子、兄弟、夫婦などになる。

妻が他人であることを忘れてしまっていることがある。ご馳走を毎

日作つてくれるのがあたりまえ、毎晩布団を敷いてくれるのがあたりまえ、何でも良くしてくれるのがあたりまえに思い、良くないときは腹を立ててしまう。妻は他人であると思えば。他人様が毎日ご馳走を作ってくれる、これは有り難い、有り難い。兄弟だから助けてくれるのはあたりまえ、見向きもしないのはけしからん。他人と思えば見向きもしないのがあたりまえ、となる。他人と思えば甘えがなくなり不平不満が、感謝にかわる。

「我以外皆他人」、これ愉快に暮らす妙法なり。

平成十七年七月記

恒産なき者は恒心なし

これは孟子の言葉で「職のすすめ」である。「恒産」は財産ではなく「一定の職業」で、それがないと「恒心」すなわち「ぐらつかない信念」もないということである。

昭和六十二年、男は笠利町で勤めていた。集落の敬老会に招かれた有名な民謡歌手が、島歌を披露して絶賛を浴びた。拍手がやむと同時に、ある老人が立ち上がり、「歌、三味線は「遊び人」がすることだ」とさげすむようなことを大きな声で言った。場内が波立った。主催者側はあわてて制止しようとしたが、唄者は少しもあわてず、その老人に向かつて親しげに「そうですね」と言った。唄者は老人が生きてきた時代背景や心情を理解し、むしろ賛意を呈する言い方だった。その一言でみんな救われた。その唄者の名は坪山豊で大島郡の人なら誰知らぬ者などいない。今も現役の第一人者である。本職は船大工である。木造船製作者の第一人者でもある。

昔与論のウミンチュ「漁人」の間で、魚を買って食べる人を「アギ

ンチュ」と言っていた。これは召し「上がる人」という意味で、魚を捕ることができない人というちよつと小馬鹿にしたニュアンスがあった。逆に農事者は魚取りに行くことを「海ユラリ」と言った。「ユラリ」は簡単に言うところ「遊び」のことである。いまでこそ暇をもてあまし「遊び」を勧める風潮になったが、子ども達まで家事労働に追い立てられ、働きずくめだった昔は「ユラリ」はあこがれであると共に罪悪視され、さげすまれていた。働くことは善で遊びは悪である。「働かざるもの食うべからず」ともいわれた。

海好きなドウダンミン男が中学生の頃、潮時になると海へ行きたくてたまらなくなり、親に隠れて行ったりした。沢山捕れたときは帰りやすかったが、捕れないときはそれこそ気が重かった。つぎ込んだ時間に見合うだけの漁獲が上がらない方が多かった。そのため「海ユラリ」となる。

日本の社会構造が変化して、一定の職業や勤め先を持たないフリーターというのが出てきた。更にニートと呼ばれる働かないただぶらぶらしている者さえ出ているという。

一昔前までは、職業を通して世のため人のためになる、あるいは自己実現を図っていくという職業観があつた。今はないとはいわないがそれが薄れてきた。「働き即人生」、「行楽一如（働くことを楽しむ）」、「働くことが生き甲斐」などの観念が強かつた。玉なす汗を尊んだ。それが心から物へ価値観が移行して賃金のために働く考え方にシフトしていった。会社に就職してもすぐにやめる。そして職業を転々とする、あげくフリーター。

生産をするための働き以外を「ユラリ・遊び」と罪悪視するのは現代にはそぐわないにしても、労働の価値はかわっていない。与論の先人は労働の大切さを「汗水節」として歌いあげている。

- 一、汗水流して 働く人の 心うれしさは 他人には分かるまい
 - 二、一日に五十 百日に五貫 貯めてそんにはならぬ 昔言葉
 - 三、心若若と 朝夕働けば 五・六十なつても二十歳 定め
- 玉なす汗には、人生の喜び、生き甲斐が玉なす、と言いたい。

平成十七年十月記

刷り込み

オーストラリアの動物行動学博士のコンラート・ローレンツは、灰色ガン（鳥）のヒナが、ふ化した直後、最初に目にした動くものについて行くことに気がついた。ふ化したヒナの目の前で長靴を動かしてみた。するとその長靴を履いて歩くローレンツの後にヒナがぞろぞろついてきたのである。本能的行動を導き出す元になるこの行動因を、ローレンツは「刷り込み」と名付けた。

生まれたばかりの人間の赤ちゃんがオツパイを吸うことも、何らかの行動因があるに違いない。遺伝子（DNA）の中に仕込まれていると言っても、スイッチをオンにしなければ動かないはずである。

刷り込みは、時期も決定的要因である。灰色ガンの場合は、ふ化した直後がポイントだった。人間の知的部分における刷り込みは、言語や音感が胎児のときから行われると言われる。お国なまりが抜けないことや、英語の発音をいくらか練習してもネイティブにはかなわないことは、そのためではなからうか。食物の味は、一つ、二つ、三つ……

九つと「つ」のつく九歳頃までに覚えた味は、一生抜けないと言われる。いわゆるお袋の味である。

ドウダンミン男の子どもの頃は食糧難で、米の飯をたらふく食べることができなかつた。それが刷り込まれていて、食べ残して捨てることができずに無理してでも食べてしまう。道具類にしても何とか役立てられないかと捨てきれない。修繕して持ち歩くと子どもたちに「みつともない」とあざ笑われる。ある人が「整理するとは、捨てることである」と高言した。ドウダンミン男が持っている「もつたいなさ」はもはや美德ではなく、単なる「ケチ」に過ぎない。しかし、それが抜けない。歳を取るに従つて、昔のことは残つていても、新しいことが脳髓に入らない。「トウスイ、ワラビ（年取つた子ども）」とはよく言つたものである。

先年、薩摩半島の海岸に、十四頭もの鯨が打ち上げられ、テレビがその救出劇を報じていた。鯨は打ち上げられると自分の体重で内臓が押しつぶされて助からないそうである。結局、生還させられずにロープで引いて、沖の海底に沈めた。ケチなドウダンミン男は、「もつた

ない。せつかくの海からの贈り物を」と一人思うことだった。昔は、鯨一頭をあげれば、村全体が潤った。大金久のイノーにその昔鯨が迷い込んだときも、付近一帯の漁師が総出で浜に引き揚げ、二・三斤ほど切り分けて各戸に配られた。その味は覚えていないが、飢えが脳髓に焼き付いているのだろう。

アメリカでジェット機を乗っ取り、乗客もろとも貿易センタービルに激突爆発した事件があつた。犯人の脳の思考回路が、レントゲンのようなもので写せたら見てみたいものである。宗教の刷り込みというよりは焼付けとでも命名できようか。突っ込むとき実行犯は「アラ―の神よ、私の人生のアルカイダー」と唱えただろうか。

※アルカイダーとは与論語で「ありつたけ」を意味する。

平成十七年六月記

嶋

「しま」の字に「島」と「嶋」がある。嶋は山に鳥がくつついた形でできている。嶋の字を簡略化（山を鳥の中に入れて）して「島」の字ができたと考えられないか。

与論島は、隆起珊瑚礁の島である。「島なし物語」には「ヨウナキー（兄妹）が舟に乗って航行中、舟の舵が引っかかった。そこに二人が降り立つと、潮が引き、島になった。海鳥の交尾を真似て子を産み、島を栄えさせた」とある。叶の高台の地名の「ハジピキ（舵が引っかかった）」はそれに由来すると言われる。

ハジピキは、海の中にある山の頂上だった。海面から出た山の頂上に海鳥が羽を休めた。それで「山」に「鳥」をくつつけて「嶋」の字にした、とドウダンミンして合点する。潮が引いたというのは、隆起したことを意味する。

朝戸の高台から高千穂神社、堆肥センター、農協の集荷場、消防署、ハジピキ、福祉センター、ヤグラへと連なる尾根（稜線）がその昔の

瀬（ピシバナ）であつたことが想像できる。谷山木工所と福祉センターの中央付近とヤグラに鉾山があつて、燐鉾石が採掘されていた。燐光石は海鳥の糞が堆積してできたものである。

大峰山の北側からカーウロー、町の淡水化プラント、那間のウロー、住宅、谷山商店からヤグラに至る県道は、昔ピシバナで、その南側は内海だつた。さらに隆起して、ミナタから西側へ続くウロー、村盛鉾山（今は埋め立てられて影も形もない）、ウワーチ、ヤグラに至る上田線の尾根がピシバナとなり、やがて陸となつた。さらに隆起して現在のピシバナが取り巻く与論島になつたと推測される。何万年か後には現在のピシバナまでが陸になり、今のイノーは肥沃な田畑になつてゐる。ドウダンミン男は観光客に「五万年後は、現在のピシバナまで陸になつてゐるから、嘘か本当か、その時にまた来て見てごらん」と真顔で言っている。このまま隆起を続けければの話である。地球温暖化が進み、南極と北極の氷が融け海面が上がると、この話も融ける。

伝説や遺跡・研究から推測すると、最初アマンジョウやウワアイ城

あたりには人が住み始め、内陸部の麦屋ゴウ、木下ゴウ周辺に住家が広がりがり、十五世紀頃には城下町城集落ができた。田畑・耕作地が広がるに從い、叶、古里、那間といった耕作地（パル・原）に移り住むようになった。「那間バル、古里バル、とは言うが、城バルとは言わない」とある先輩が言った。城の識者が酒席で「あなた方はパルンチュだ」とさげすむように言ったのが印象に残っている。ちなみに、城、朝戸、西区あたりは「さと（里）」という。

当時、兄弟親族の住む朝戸など住み慣れたところから、遠くのパル（耕作地）に移り住むのは親族からの反対もあり、相当に勇気がいるものだったようである。パルに移り住んだ人は、作場への利便を考え、それぞれの耕作地の真ん中付近に家を建てた。そのため城、朝戸の密集型と違い、散在型になっている。この散在型は、大島郡内ではあまり見られない特異な型である。先人のフロンティア心の片鱗が見える。とは言っても、移り住んだ先で兄弟・従兄弟といった先祖を同じにする人々がかたまりをなしている。これは親の土地を兄弟が分けてもらったからである。

昔、与論小学校の前のガジュマルの下で、トビウオ、ピキ、イラブチなど網の魚を蘇鉄の葉でハエを追いながら、売っていた。城んちゆ（主に城周辺の人々）など魚をかう人を「アギンチュ」と言っていた。「パル、サトウ、城んちゆ、キンジャンチュ、アギンチュ」などの言葉に、与論島の成り立ちや住む人々の心の「しま」模様がある。



平成十六年十二月記

もつともだー

小原庄助さん 何で身上つぶした？

朝寝 朝酒 朝湯が大好きで

それれで 身上をつぶした

ああ！ もつともだー もつともだー

名瀬にサウナ風呂を備えたホテルがある。宿泊客はサウナがただなので、男はそこに泊まって余得気分になる。血圧が高いため敬遠していたのだが、一度は体験してみようと思つて入つてみた。中にいる人たちは平気でテレビを見ている。しかしサウナ初体験の男は、あまりの熱さに顔が露出できない。タオルを顔に当てたり、頭からほかぶりをしたりして我慢した。血圧の高い人には向かないと言ふのは「もつともだー」と思つた。全身汗が噴き出してくる。血圧を警戒して三・四分ほどで出た。汗を流してお湯風呂に浸つた。

サウナから出てきたある人が、水を二・三回体にかけて汗を流すな

りいきなり水風呂に飛び込んだ。しかも頭も突っ込んで潜る。あれじや心臓に悪いのではないかと思ひながら見ていた。ところが次の人もいきなり水風呂に入った。水泳のときなど、いきなり水に飛び込むのは心臓麻痺を起こす恐れがあるので徐々に入らなければならぬという観念のあるドウダンミン男には、その光景はちよつとした驚きだった。ドウダンミン男は、お湯風呂から水風呂に入った。それでも息を呑み込むほど冷たく感じた。

人がやるのだから俺も体験だ、とばかりに、サウナからいきなり水風呂に入った。滝を飛び降りる気持ちである。入った直後はヒヤツとするが、間もなく冷たさが爽快さに変わる。サウナは汗をかく心地よさが表だとする、この「ひやり爽快」が裏樂しみだと思った。

熱気に身をさらし、汗びっしょりになった直後に、冷たい水風呂に飛び込む。体にとって虐待とも言えるシヨック療養である。

全身汗をかくのはいい気持ちである。毎日入っていたら、我が下腹部のだぶだぶもとれてスリムになるのではないかと思ひながら、腹をなでる。出る汗は、タオルを何回も絞らせる。飲み過ぎた翌日サウナ

風呂に入ると体の中の毒素が出てすつきりする、と言った人がいた。ああ！もつともだー もつともだー。

知人の実業家に、「与論に温泉が出たら、この高齢化社会、島内だけではなく、島外からも長期保養客が見込めるのだが」と話したら、「調査済みで、千三百坪掘れば出る」との答えだった。さらに掘り下げて企業化の構想まであることを伺い、夢想していたドウダンミン男は恥じ入り、感服つかまつるしだいであつた。

タラソテラピー（海洋療養）が脚光を浴びている。それなら真つ白な砂浜とモツテコイなイノーがある。《生まれて潮に湯浴みして、イノーをプールに育った、我ら海の子》。島全体がテラピーアイランドとは、これ天恵。これを観光の「売り」にもつともつと宣伝したらよい。

与論の沖にある良質の深層水は、化粧品製造に一部利用されていると聞いた。深層水の活用は今後広がり、貴重な与論の資源になる。深層水風呂、さらにはサウナ風呂の蒸気を深層水で発生させ、深層水サウナ風呂として相乗効果を高める。「美容と長命のタラソ風呂」と銘打

つ。高齢化社会、健康と長寿、ゆったり、ゆっくり夢の島。現世の最うっし後の楽園、与論島。

与論よいとこ、心の滋養強壯に、一度はおいで。

海水、温泉、人情に浸りや、心安らぎ、命伸びる。

(来た人が) ああ！ もつともだー もつともだー

平成十七年七月三十一日

豆腐

石臼（うす）で大豆をひき、各家庭で豆腐をつくった。子どもの頃夜なべにそれをさせられたものである。嫁入りに長持ち、長豆腐を担いでいった。あの時の長豆腐は、今の豆腐三丁をつなげたものだったように思われる。

豆腐半丁と焼酎二合を毎晩の楽しみとして生きていると言う人がいた。冬は湯豆腐、夏は冷や奴。呑んべーにはたまらん。

豆腐一丁百五円（内消費税五円、平成十七年現在）である。お茶、ジュース、水が五百ミリリットルペットボトルで百五十円する中で、安くておいしく栄養満点。何あろう、ドウダンミン男も豆腐大好き人間である。

煮ても焼いても食えない奴とは反対に、煮ても焼いてもいい奴が豆腐である。ユシ豆腐に味噌を入れた豆腐汁。沸き立つ油に入れた揚げ豆腐。がんもどき。人々はこよなく豆腐を愛し、祝祭日のご馳走には必ず入れる。

沖永良部では豆腐のみそ漬けを作っているのに驚いた。「豆腐の角に頭をぶつつけて死んでしまえ」という言葉があるように、柔らかいものとばっかかり思ってたら、山形では塩をまぶし寒天の空に凍らせ、鯉の削り節のように削って使う六淨豆腐があるそうだ。「豆腐で歯を痛める」という言葉があり得ないことの例えでなくなるから世の中広い。そのほか高野豆腐のように保存食にも加工されている。

豆腐は、重い石臼の下をくぐり、細かい袋の目をくぐり、ニガリを打たれ、四角い箱に入れられて重石を掛けられて生まれてくる。そんな苦勞の出自を持つ豆腐。白くて軟らかさがあり、しかも身を崩さぬだけのしまりはもっている。煮ても焼いてもよく、それぞれの味を出す。相手の食材を嫌わず、どれとでも合う。この豆腐の特性を擬人化して、「人間、豆腐の如くありたいものだ」と男は言った。

この万人に愛されている豆腐に、あろうことか「腐（くさる）」の字を当てたのはいかなものか。

「腐る」と「発酵」は、兄弟である。酵母や細菌類が穀物や肉類に作用して有益なものができる場合は「発酵」と言い、有害な場合は「腐

る」と一般的に言っている。発酵の産物は、酒、味噌、醤油、酢、チーズ、ヨーグルトなどなじみのものである。

豆腐の命名者は、豆腐は豆が腐ってできたものだ、よもや勘違いしたのではあるまいに、「腐」の字を当てたのは悔やまれる。「腐る」とは何ともイメージが悪い。とうふは、真つ白で清潔感あふれる。味も淡泊。今では欧米人にも好まれている。

漢字を考え出した人、名前を付けた人にはかねがね感服することばかりであるが、この豆腐の「腐」を当てただけは感心できない。豆腐屋は何故変えようとならないのだろうか。例えば「豆富」とでも。我が愛するトーフの名誉のため即刻変えるべし。

平成十七年二月記

螢の光

一月は行く、二月は逃げる、三月は去る、四月は知る。三月末から四月初めにかけては、公務員の人事異動期である。学校の先生方の送別会、歓迎会、花盛りである。

学校の先生方の歓迎式で、ある先達者は、「皆様方の評価は、島を去るときは港で定まる」と挨拶された。シビア（厳しい）なことをお話しやるものだと思つたが、現実はその通りである。

中学校と高校のPTAが合同で先生方の送別会をしていた。終宴にある若い女の先生が胴上げをされていた。酒の酔いも手伝つたのだらうが、すばらしいなあ！愛された先生だったんだなあ！人の世つていいものだ！とどよめきの中で感動に浸つた。ドウダンミン男の家路は、しんみり、ほのぼのとした月明かりの中だった。

山下肇先生が、大和村の学校の校長を辞めて帰郷されるとき、名瀬

港で大和村の方々が盛大な見送りをする光景を見た。当時は交通事情が悪く、前日に出てきて名瀬で宿泊しての見送りである。その人数・活況ぶりに、山下先生の偉大さを思い知らされた。男の花道をみた。

生徒数一千名近くの金久中学校にいたときのことである。学級編成の名簿を張り出す。それを見て抱き合つて喜ぶ生徒がいたり、悲喜こもごもの情景がある。担任の発表のときは緊張が走り、どよめき、歓声などのうねりがある。運命が漂う時間である。親は、当たりくじ、はずれと評する。宝くじの当たりはずれとは違い、教師たるもの骨の髄までしみさせ、拝受しなければならぬ事象である。

教員に採用されて、着任式終了後に、同期の三名が校長室に呼ばれて、「お前たちのような新卒はとりたくなかったが仕方なくとった」というのが校長先生の訓辞の第一声だった。「勉強して早く遜色のない教員になれ」という激励だったと思うが、何しろこちらは大学出たての希望に胸膨らませた社会人第一歩の青二才、その真意は分からず、不服さえ覚えた。

また、竹内教育長は、「子ども達や親には先生を選ぶ権利がない」と訓辞した。同様に一流の教員であれ、との意味である。運命的とも言える教師と生徒の出会い、骨身の鉄筋とする訓戒である。

与論高校ができる以前の与論中学校の卒業式は涙ものだった。卒業すると就職、進学とバラバラに別れて行くせいもあったと思う。答辞が涙声になることがしばしばであった。今は与論高校の卒業式にその感懐がある。親をこえる大きな子が目を潤ませると、こちらの胸も熱くなる。町聡君の送辞、佐藤愛子さんの答辞は会場を酔わせた。感情を移入し、それがもろに伝わってくる。感動この上ない名辞だった。

保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学と、三月は別れの季節である。「も、一度会いたい」そんな別れであるといい。

新しい出会いのために別れがある。四月は新しい出会いがある。それはまた別れが待っている。「蛍の光・・・別るる後にもやよ忘るな」。泣かせるー！！

平成十七年三月末記

水訓

天才軍師といわれた黒田官兵衛は、水に学び、「水五訓」を作った。そして自らの号も「如水」とした。

「岩もあり、木もあり、されどさらさらとたださらさらと水は流れる」

岩があつても木があつても水は逃げず、逆らわず、また力まず、自然にたださらさらと岩をこえ、木をこえて流れてゆく。この無心、自然さ、強さ。浅いところでは早く、深いところではゆっくりと何思うことなくただ流れる。

勝った負けたと騒ぐでなく、宇宙からみれば小さな地球、悠久の歴史からみればたかが百年の命。

たかが人生、されど人生
散る桜 残る桜も散る桜

人生喜怒哀楽、腹の立つこと、苦しいこと数々あれど、たださらさらと水の如くゆきたい、生きたい、ありたい、と、ドウダンミン男も思う。

《水五訓》

- 一、自ら活動して、他を動かさむるは、水なり
- 二、常に己の進路を求めてやまざるは、水なり
- 三、障害にあつて、激しくその勢力を百倍しうるは、水なり
- 四、自らは潔うして他の汚濁を洗い、清濁合わせいるる量あるは、水なり
- 五、洋々として大海を満たし、発しては霧となり、雨雪と変じ、霰と化す。玲瓏（れいろう）たる鏡となり、しかもその性を失わざるは、水なり

「上善は水の如し、水はよく万物を利して、争わず、衆人の憎むところによる。故に道に近し（老子）」

石徳五訓

第一、奇形怪状、無言にして能く言うものは石なり

第二、沈着にして気精永く土中に埋もれて大地の骨となるものは石なり

第三、雨に打たれ、風にさらされ、寒熱に耐えて悠然動ぜざるは石なり

第四、堅質にして大厦（たいか）高樓の基礎たるの任務を果たすものは石なり

第五、黙々として山岳庭園などに趣を添え、人心を和らぐるは石なり

*盆栽趣味の究極は石だといわれる。ドウダンミン男にもそのウブンがあればと思うが、所詮かなわぬ高嶺。

竹訓

ドウダンミン男の姓は「竹下」である。「竹」に縁があるような気がして愛着を憶える。父は庭に小山を作り、竹を植えた。その下に祖父の名前と「親がなしうかぎ」の石碑を建てた。

トウラは、「トオトウガナシ茂徳 うもた」の石碑を並べて建てた。竹も増やすために一株は西田の本家から、もう一株は曾祖母の本家（川畑恵盆家）から分けてもらって植えた。さらには、金明竹（二万八千円）を買って植えたが二度も枯らしてしまった。懲りずにまた来年植えようと思つてゐる。竹の生きようを心として生きたいと「竹訓」を作つた。

《竹訓》

一、天を指してまっすぐ伸びる

(素直で正直、天を向く)

二、節目、節目があり、中は空

(けじめをつけ、腹に何も持たない)

三、縦にはすぱっと割れるが、横には切れない

(筋を通し、邪は許さない)

四、冬は雪の重みに耐え、融けたらすつくと立つ

(柔軟で忍耐強い)

五、地下ではみなつながっている

(同族の絆)

竹下を名字にいただいたことを最上の喜びとし、竹の訓えの下に生きることを心に誓い、これを家訓とする。

(平成七年七月吉日 竹下徹)

タコ訓

小学生の頃イヌガ（けら）にかまれて泣いたことがある。イヌガは、空を飛べるし、木にも登れる。泳ぎも穴掘りもでき、走れもする。宇宙創造の神様はいろんな動物に、いろんな特性を与えてある。タコもその一つ。タコは体色をいろいろに変える。死んで（脳死？）から数時間後までも色がめまぐるしく変わる。人がちよつとしたことで怒って顔色を変えるのを、与論では「イルタゲー」といって小馬鹿にする。タコは手が切れても後から生えてくる。手の切れたタコを見かけるが、タコはひもじくなると自分の手をかみ切つて食べるからだ、ときかされたが真偽のほどは分からない。タコの生き方に敬意を表して「タコ訓」を作った。

《タコ訓》

ドウダンミン作

- 一、骨がなく全身筋肉で、形を自由に換えられる。
 - 二、体色も自在に換えられる。回りに合わせることもできれば目立つこともできる。
 - 三、変換することができるのは、変わらないこともできる。強力な吸盤を持ち、吸い付いたら放さない。
 - 四、手は切れても再生する。
- 他人と過去は換えられないが、自分と現在は換えられる。常に自分を変えて生きる、それがタコの生きる道。

生涯の恩師

人生七十、古来希なり。昭和十一年生まれのドウダンミン男は、古希を迎える。そのお祝いに、恩師から「敬天愛人」の石碑が送られてきた。

学ぶ心があつて、師がある。吉川英治は、小学校しか出ていない。彼は百科辞典を五十回読んだと言われている。人一倍努力家だったから「我以外皆師」という彼の名言は光る。

ドウダンミン男は横着者だった。高校三年生のとき、隣の組の友達と廊下で立ち話をしていた。始業のベルが鳴り、横を担当の先生が通つて教室に入つても、やはり話していた。先生は、「竹下」と大声を發した。その声で教室のガラスががたがた音を立てた。雷が落ちたほどだった。七十年生きてきた中で一番大きな人の声だった。男が、宮崎大学と鹿児島大学を受けに行くとき、「両方とも大丈夫だから、行つてこい」と励ましてくださった。担当の国語に造詣が深く、みんなの信望も厚かった。今でも心に残る恩師である。

与論中学校に勤務していた中年男は、全校集会で話をする事になった。校長先生に一礼してから指令台に上るのが通例になっていたが、男は故意にはなかつたがそれをしなかつた。集会が終わり職員室に入るなり、「なぜしなかつた？」と校長先生の雷が落ちた。その時もガラスが音を立てた。その後、その校長先生が転勤した学校の研究公開があつたときに、私を司会役におしたててくださった。離れていても何かと引き立てていただいた職務の恩師である。

中国の武将諸葛孔明が、命令に背いた腹心・馬謖を、規律維持のため私情を捨てて「泣いて馬謖を斬つた」という故事にはほど遠いとしても、ちよつぱり通じるものを感じて私淑している。

「厳家に悍慮（かんりよ）なく、慈母に敗子あり」。厳しい家には、怠け者の召使いはいない。優しすぎる母親には、敗れた子、つまり親不孝の子ができる、という意味である。青少年の非行は、先生の鞭（むち）がなくなつたからと冗談交じりに言う人がいた。体罰がいけないのは言わずもなだが、凜とした厳しさは成長の糧である。叱られることは有り難いことだと悟りたい。

益田教育長が二十五年にひとりの校長と称えた久永校長に、教頭として二年間仕え、多大な薫陶を受けた。私が転勤になったとき「ほんとうのつきあいはこれからだよ」と言われた。以来変わらぬ交誼が続いている。久永先生から左記の石碑が送られてきた。その裏面に左記の文言を彫って、庭の正面に建てた。

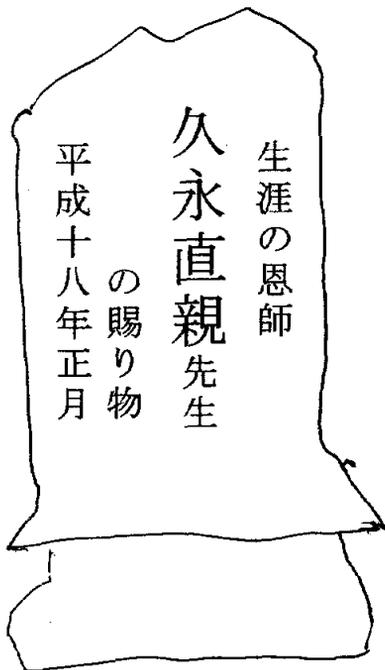
祝古希

道は天地自然なるもの故
向学の道は

敬天愛人を

目的として道を窮するに
克己を以て終始せよ

西郷南洲翁



中国に、師を重んじ道を重んずる「恩師重道」思想がある。
水を飲むときは、井戸を掘った人の恩を思え。
誕生日には、母親の産みの苦しみを思え。

「親がなしお陰、人程になつて」

七十路になるドウダンミン男は、記念碑に刻み込んである師の恩を拝み、心に刻む。

平成十八年正月